

風俗

〔燕石襟志三〕わがをる町

〔日本地誌提要<sup>二</sup>東京〕市坊 壹千壹百七拾七町六大區ニ分チ、七拾小區ヲ置、  
戸數 壹拾四萬九千三百八拾三戸 内寄留壹萬五千 社壹百零四 寺壹千零貳拾六  
人口 五拾九萬五千九百零五人 男三拾壹萬零々五拾零人、内寄留五萬三千壹百六拾貳人、女貳拾八萬五千八百五拾五人、内寄留貳萬九千四百三拾八人、  
○按ズルニ、本書ノ凡例ニ戸數人口ハ戸籍寮明治六年一月一日ノ表簿ニ据ルトアリ、

ゆたけき御代の長久なる隨に、物として今大江戸に具足せざるはなししかれども昔ありて今なきものは、神田の勸進能<sup>明神の社地にあ</sup>りしといひ傳ふ説經座<sup>堺町天満</sup>八太夫<sup>耳垢取三町目</sup>にをれりと、神田紺屋町<sup>子に</sup>獸の藝<sup>シ</sup>、鑓師<sup>水右衛門と稱ス、湯島天神前</sup>にをれりと、同書に載たり、被衣したる女子、野呂間人形つかひ、山猫まはし、おはらひおさめ、すたすた坊主、太平記よみ<sup>街頭に立て</sup>、太平記を<sup>よみ、錢を乞しもの</sup>、唄比丘尼、五月の菖蒲人形賣扇の地紙賣奉書足袋賣<sup>紙にて足袋をつくりて、雨これら今はなし、このうちすたすた坊主、おはらひおさめ、唄比丘尼と、扇賣は、二三十年以前までありけり、十歳前後の小比丘尼ども、黒き頭巾を被り、裾を高く引あげ、腰に柄杓を插たるが、三四人を一隊とし、老尼に宰領せられて、人の門に立、いと訛<sup>ズ</sup>たる聲してうたを唄ふに、物をとらせざれば、おやんなといふて催促せり、昔は簾をすりて唄ひしかば、今に比尼簾の名は遺れりとぞ、地獄變相の圖を説示して愚婦を泣せし熊野比丘尼の流なるべし、伊勢比丘尼の事は、自笑が愛敬昔男といふ冊子よくその趣を盡せり、扇賣は地紙の形したる箱をかさねて肩にし、毎夏に巷路を呼びあるき、買んといふ人あれば、その好みに任し、卽坐に是を折て出しき、唯今三十以下の人は、かゝる事をもゑらざるべければ、年のをはりの靈祭は、建武の比既に絶たるが、東のかたにはなほありと、兼好が徒然草にはいへれど、今は東にても俗子はさる事ありともゑらずなりぬ、京の懸想文賣、伊勢の衝入泉州堺なる九月の雛祭も、僅にその名を存するのみ、近屬江戸にて猫の畫か、んと呼びあるきて生活と</sup>